歌舞伎研修会(白雲座)

１　はじめに

平成 30 年 11 月 2 日(金)､秋の県文化財保護協会主催「地歌舞伎観劇研修会」が、今年は、下呂市無形民俗文化財に指定されている白雲座地歌舞伎の公演会に参加する形で行われた。参加人数は大垣と岐阜・美濃市からバスで参加された方が 27 名、現地で参加された 13 名を合わせると 40 名の多数に上った。途中バスから見る奥美濃・南飛騨の紅葉が美しく､また車中で食べた弁当が良く、会員は道中から満足されていたようだ。開演までには少し早かったが 12 時 30 分に下呂市門和佐にある白雲座に到着した。すでに観客は入場しており、会員は各自自由に席につき、隣の人と自由に懇談し、地芝居の魅力やどこから観劇に来たのか等を話し合っている内に開演の時間を迎えた。

２　白雲座の概要

江戸時代から明治時代､美濃や飛騨では地元の人々による地芝居(歌舞伎)が盛んに行われており、数多くの芝居小屋が建てられた。白雲座もその一つで、毎年 11 月 2 日と 3 日、白山神社の秋祭りで「白雲座歌舞伎大講演会」が上演されている。今年は 40 回の記念講演に当たる年であった。建物の規模は､間口 16.38m、奥行き 20.02m。切妻造､妻入りの総檜造りである。小規模な芝居小屋とはいえ、回り舞台、花道、仮花道などを備えており、古い形を残す劇場型舞台である。回り舞台の直径 5.4mのこま回し式舞台である。客席は一部に階建ての桟敷席を持ち､収容人数は 400 人だそうだ。

白雲座は舞台にある落書きから明治 23 年 3 月 27 日に柿落としが行われていることから明治 22 年～23 年の建築と推測される。明治には地元の人々による地芝居が行われたが、昭和に入ると戦争で中断し、白雲座は一時倉庫として利用され、売却の話も持ち上がった。昭和 43 年に青年団によって再び地芝居が復活し、昭和 53 年には文化庁から「門和佐の舞台」として国の重要有形民俗文化財に指定され、これを機に白雲座歌舞伎保存会が結成され､昭和 56 年からは子ども歌舞伎も上演されるようになった。なお、この保存会の活動に対し本会から平成 17 年と 25 年に文化財功労者表彰を送った。

３　平成３０年度の演目の解説

公演の演目は、子供歌舞伎「本朝弐拾四孝　十種香の場」､「寿曽我対面　工藤祐経館の場」､「春

日乃夕神楽　良弁杉の由来」、「新版歌祭文野崎村　百姓久作住家より引舟まで」の四本であったが、私たちが鑑賞したのが十六人の門和佐地区の小中校生が演じた子供歌舞伎「本朝弐拾四孝　十種香の場」と村の若衆が演じた「寿曽我対面　工藤祐経館の場」であった。子供たちは十月の初旬から準備・練習をはじめ、見得を切るところでは観客からかけ声とお捻りの嵐だった。

４　あとがき

本日の演目は、全て見られず、岐阜・大垣に帰る時間を考慮して、仕方なく 16 時 10 分に白雲座を後にした。バスの中で白雲座からいただいたパンフレットと事務局が作成した白雲座見学の資料を見ながら短い時間であったが本日の文化財（無形民俗文化財）研修の学習の意義と白雲座歌舞伎保存会の方々のご苦労に心から敬服しました。

なお、本会から、白雲座の丁重なおもてなしに対して花代(左記写真)を寄付したことを報告します。